水の旅

平松礼二

日本画家

二十年ほど前からフランスへの旅を続けている。五十歳になった時、パリでは初めての個展を開催した。初日のレセプションを終えてブラリと美術館へ入った。それまでアジア一辺倒でヨーロッパにはあまり高い関心を持っていなかったのでブラリだったのだ。このブラリ入場で出会った一点の絵がその後の私の生き方を変えるくらいの切っ掛けになるとは、その時夢にも思わなかった。美術館はオランジェリー、作品はクロード モネの超大作「睡蓮」シリーズ。作品の前で棒立ちになった。屏風状の横長カンバスに描かれた池に浮かぶ睡蓮、そして水に映る光や雲。棒立ちの原因は西洋画・印象派なのに日本画の雰囲気が強く感じられたこと。なぜだろう。長い間ギャラリーの中を檻の中の熊みたいにグルグル歩き回ったが答えは見つからない。帰国して図書館で猛勉強を始めた。なにしろ日本画家にとって印象派は遠い存在だったのだ。

十九世紀後半からの印象派画家たちによるある種の「ジャポニスム」をくわしく知った。興味は募る一方で。現地へ行くべし。とフランスでのつてを頼りパリのボザールへ。紹介者があってパリから一時間くらいにあるセーヌ川添いのジヴェルニーへ向かった。ここにあの超大作睡蓮を描いたクロード モネの旧アトリエとモネが作った花と水の庭がある。館長さんや庭師の長であるG・ヴァエ氏から、戦後完全復元したときの苦労話を伺ったりもした。またこのモネの睡蓮は日本からもたらされたものであることも大きな驚きであった。

「なぜ」から始まり足繁く通うちに、考察と実験としてこの夢の掛橋の謎解きを日本画で制作してみようと思い立った。日本とパリ・ジヴェルニーを往復しつつ描いた作品が一〇〇点ほど完成したので、日本橋高島屋の画廊で一九九九年に発表をした。タイトルは「印象派・ジャポニスムへの旅——日本画家の視線」。それがパートI。以後回数を重ね、美術館や画廊でおよそ一〇〇〇点を描いて何度も発表してみた。初めてのパリで「ブラリ」と立ち寄ったあのときの衝撃から二十年余の月日が経った。その間の足跡の中で記念すべき出来事がある。友情の証としてモネ財団から頂いた睡蓮株を二〇〇六年に開館した町立湯河原美術館・平松礼二館の庭の池にお貸しした。日本とフランスをつなぐ記念として、今も美しく愛らしい花を咲かせている。

ご縁が繋がりジヴェルニーの公立印象派美術館の主催で、今年の七月一三日から一〇月三一日まで私の個展が開催される。私は屏風四点を含む二六点を展示する。それらは日本の美術館から借りる一点を除いてすべて新作であり、同館の購入収蔵となる。また企画のコンセプトとして、モネの作品六点とモネがコレクションした北斎や広重の浮世絵二六点も同時に展示する合同展となる。この展覧会は“第二回ノルマンディー印象派フェスティバル二〇一三・テーマ「水」”の六大特別展のひとつであり、この他六〇〇以上の芸術イベントが予定されていて、世界から一〇〇万人以上が訪れると聞く。

画＝平松礼二